第４章　まとめ

第１節　奥新田東古墳群の特徴

奥新田東古墳群はその出土土器などから、１号墳が６世紀末～７世紀代、２号墳が７世紀第４四半世紀に築造された古墳であると判断されたが、１号墳から出土した装飾付須恵器は、石川県谷崎横穴出土の子持台付長頸瓶に見られるように、７世紀にも装飾付須恵器は存在していることから、１号墳の時期に幅を持たせた。次にその時期を考える上で、１号墳石室の形態について類例を探ってゆくことにする。つまり、１号墳石室の特徴の一つに、石室前端に立石の存在があり、周辺で立石をもつ横穴式石室を求めてみると、加古川市中山１号墳や同市池尻16号墳、升田山15号墳がある。また、加西市状覚山10号墳、中町東山15号墳も同様の特徴を持つ。管見では加古川右岸流域にのみ認められるが、特に東山15号墳を除いた加古川下流域に集中しているようである。なお、ここで立石として扱ったのは、石室壁の２段以上の高さを持つものに限っている。これらのうち、中山１号墳、升田山15号墳、池尻16号墳、東山15号墳は両袖式の石室で、袖石も立石である。中山１号墳は遺物が出土していないため、時期が不明であるが、升田山15号墳と池尻16号墳は６世紀後半に位置づけられている。一方、東山15号墳は７世紀中葉と新しい。状覚山10号墳については、７世紀後半と最も新しく、奥壁石材の大きさが違うものの、無袖の石室であることや石室幅・長さの点で奥新田東１号墳に最も類似し、時期的にも近いものと考えるべきと思われる。そうすると奥新田東古墳群は１・２号墳ともに７世紀後半頃に築造された古墳群であることとなる。さて、奥新田古墳群には西古墳も存在するのであるが、西古墳については加古川市教育委員会が平成８年度に発掘調査を実施し、穹窿式石室の系譜を引く横穴式石室で、時期も６世紀後半（第３四半世紀）であることが判明した。奥新田東古墳群とは時期が全く異なることから、別の古墳群として扱うべきと思われる。

次に奥新田東古墳群の２古墳の諸特徴を挙げると、墳形は１号墳が円、２号墳が方形を意識、石室は１号墳が無袖であるのに対して、２号墳は袖を意識して石を立てている。石室内は２号墳が玄室内に埋葬施設が非常に多く存在するのに対し、１号墳では玄室中央に１基のみ推定される。

１・２号墳の周溝が重複する部分では、土層の観察では１号墳の周溝が２号墳のそれを切り込んでいるように観察できた。しかし、現在他の要素で１・２号墳の築造時期を比較したところ、２号墳が１号墳に後出すると考える方が自然である要素が多いことは否めない。

ただし、１号墳から遺物が断片的にしか出土していないため、他の要素で推定せざるを得ないが、石室形態や立石の問題など、比較するにも資料が少なすぎる状況のなかでは、それも難しい。今後の課題としておきたい。

第２節　石室内に小型石棺を内蔵する古墳について

奥新田東古墳群はその出土した土器などから、７世紀も後半に築造された古墳群であることが判明した。従来[(1)]は、７世紀の前半には古墳の築造（造墓期）が終了し、追葬期に入るとされていたものが、近年、本古墳群のように、７世紀も後半に入ってなお、古墳が築造され続ける例が多く発見されるようになった[(2)]。しかし、これらの古墳群にはそれまでの横穴式石室とは違って、縮小あるいは簡略化した石室

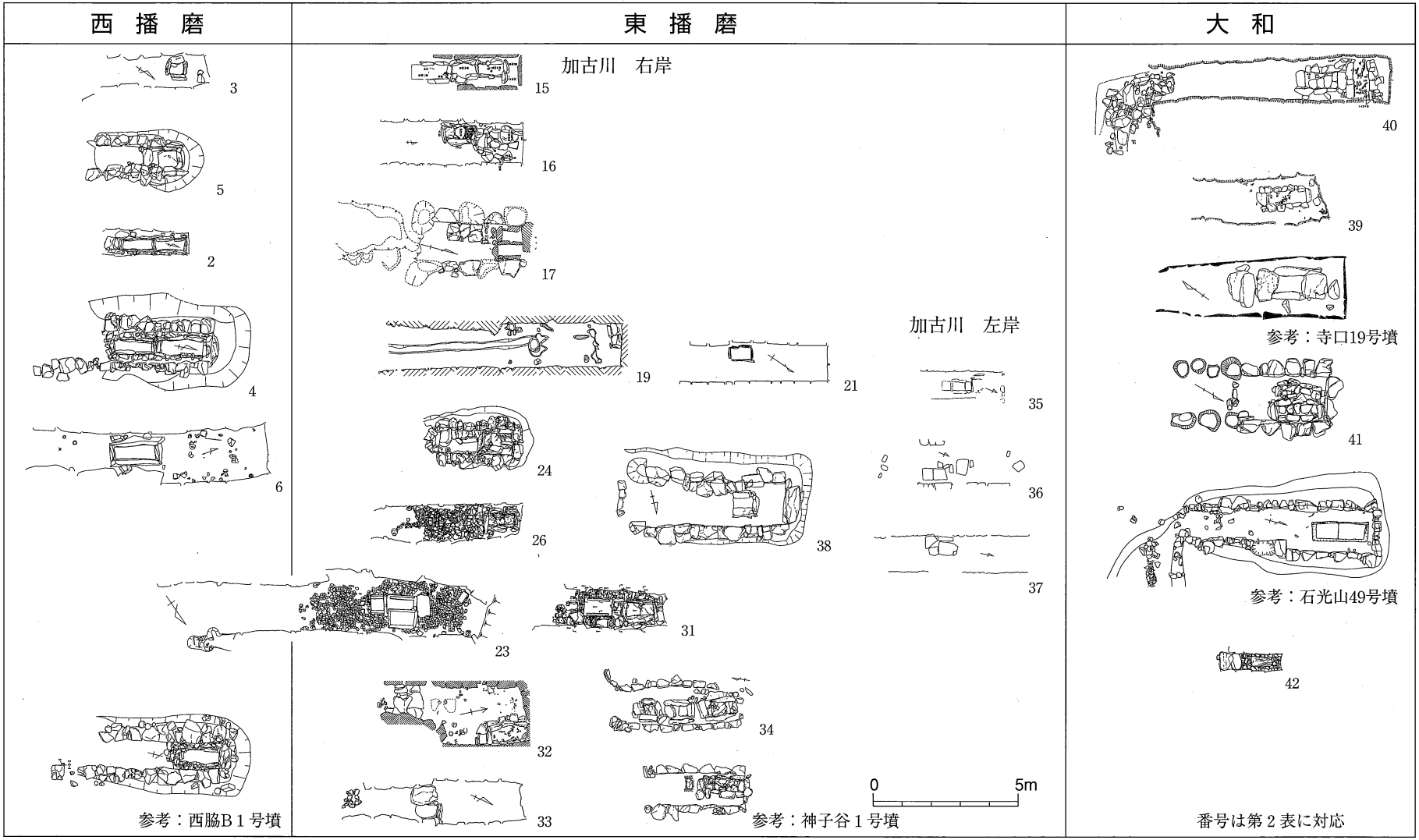
に移り変わっていることが窺え、小石室や石棺、小竪穴式石室等と呼ばれている。これらのなかにあって、奥新田東２号墳のように大人が伸展葬では入りきらない大きさの石棺が検出されることもしばしば認められる。本節では、奥新田東２号墳のように横穴式石室内に小石棺を内蔵する古墳の類例を求め、その意味を知る上で、本古墳の位置づけを行う。ここでは、大人の伸展葬が不可能な大きさに注意して、長さ1.5m以下のものについて小型石棺とし、管見で諸例を集めたのが第５・６図、第２表である。

さて、２号墳と同様、小型家形石棺を内蔵する横穴式石室墳には加西市大内町のヤクチ４号墳[3]がある。石室は長さ10.7mと推定され、組み合わせ式家形石棺は玄室内中央の石敷上に安置され、側石が倒れ、蓋石が底石の上に乗った状態で検出された。石棺の内法は78×37cmであり、奥新田東２号墳とほぼ同規模である。石棺が置かれた詳細な時期は不明であるが、石室が築かれ、利用されたのはＴＫ43（６世紀後半）～ＴＫ217（７世紀前半）型式の間である。小型家形石棺については間壁氏が詳しい[4]が、家形石棺のうち、横穴式石室内に収められ、長さ1.5m以下の小型のものはほかには無いようである。

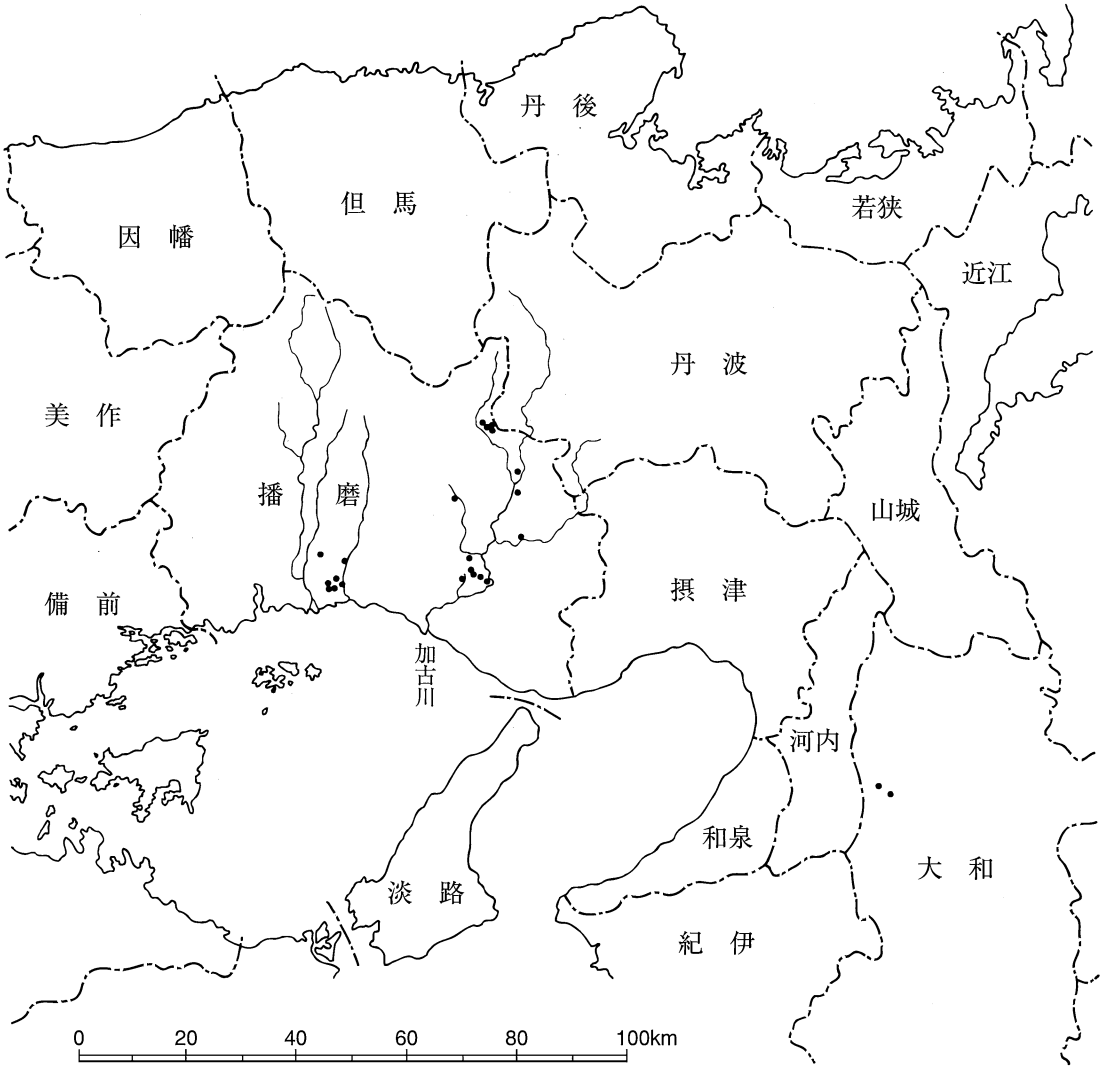
兵庫県内では、切石以外の小型石棺が横穴式石室内に置かれる例は加古川流域に多く認められる[5]ようであるが、西播磨にも存在する。西播磨では姫路市西脇古墳群[6]中の４基に認められ、長さ1.5mを少し越えるものは２基存在する。Ａ支群24号墳とＢ支群８号墳では２棺が直列する。Ｂ８号墳２号石棺内から刀子が出土し、底は炭敷であった。Ｂ52号墳石棺からは耳環２と棺底に炭・灰混じりの土が認められた。Ｂ４号墳石棺内でも炭敷があり、耳環が１点のみ出土している。時期は飛鳥Ⅱ～Ⅲ（古）（７世紀第２四半～第３四半の前半）に収まり、やや古い傾向を示す。姫路市丁古墳群[7]中には２基存在し、５号墳は棺内に約５cmの厚さの炭層が認められた。出土須恵器からＴＫ 217型式の新段階と考えられる。山頂９号墳[8]の詳細なデータは不明であるが、２棺が直列し、棺内に炭層があるものや成人女性の腕と足の骨が並べられていたものがある。姫路市下野古墳群[9]では、時期不明であるが、12号墳に２基の小型石棺、14号墳では長さ1.7mの石棺が安置されていた。姫路天神山古墳群では５～７号墳の３基において認められた[9]が詳細不明である。そのほか前山古墳群[9]、朝日山古墳群[9]、檀特山古墳群[9]中に存在するようだが、規模・時期などの詳細は不明である。太子町域では原・北町古墳[10]で玄室内に４基の石棺が存在していた。

東播磨では加古川中・下流域に存在し、北方では多可郡中町に目立って多く存在している。女夫岩古墳群中１号墳[11]の石室内には４棺が並び、すべての棺から人骨が検出され、第１主体は熟年男性と推定されている。２つの棺からは刀子、１棺の埋土には炭が認められた。２号墳は２棺が直列し、両方から人骨が出土し、第１主体からは耳環２点が出土している。出土土器から７世紀後半と推定できる。石垣山２号墳[12]では玄室（？）奥壁に接して２棺が並列しており、それぞれ金環１と棺底には炭が混じっていた。出土須恵器からＴＫ217型式と考えられている。東山古墳群[13]中12・13号墳の２基の石室中に小型石棺が認められ、12号墳の石棺からは２体分と推定される人骨と刀子２・耳環１が出土している。入角古墳群は82基からなる[14]が、そのうち23基が調査[12]され、十数基に石棺が認められる[5]という。報告書が未刊行であるため詳細は不明であるが、断片的に公表されているもの[15]から、１～３基の石棺が横穴式石室内に直列あるいは並列して存在しているもようである。詳細な時期は不明であるが、７世紀が中心と考えられている。

西脇市には高松７号墳と坂本１号墳の２基が存在する。高松７号墳[16]は３棺が直列し、棺内は調査されていないが７世紀後半～８世紀初頭の時期が与えられている。坂本１号墳[16]の小型石棺は袖部に位置し、７世紀末の時期が与えられている。加東郡社町の三草85号墳や吉馬東方にも存在しているようである。



第５図　小型石棺を蔵する横穴式石室



第６図　横穴式石室内に小型石棺を蔵する古墳分布図

番号	古墳群	所在地	古墳名	石室形態	石棺名等	棺長	棺幅	棺内状況	文献
1		揖保郡太子町	原・北河古墳	右片袖	4基				10
2	西脇	姫路市西脇	A24号墳	無袖	1号石棺	0.97	0.43		6
					2号石棺	1.09	0.4		
3			A35号墳	無袖		0.5	0.42	奥中央	
4			B8号墳	無袖	1号石棺	1.45	0.55		
					2号石棺	1.25	0.52	炭敷き、刀子	
5			B52号墳	無袖		1.3	0.56	耳環２、棺底に炭・灰混じりの土	
6	丁	姫路市勝原区	第１次５号墳	片袖		1.35	0.45	棺内に約５㎝の炭層	7
7			山頂９号墳	無袖？	1号棺			女性成人の腕と足の骨が並べられていた	8
					2号棺			棺内に炭層	
8	下野	姫路市広畑区	12号墳			1	0.6	もう１棺は詳細不明	9
9	天神山	姫路市書写	5号墳			0.5	0.4	石室入口の東寄り	9
10			6号墳					石室入口近く	
11			7号墳					石室入口近く	
12	前山	姫路市飾東町							9
13	朝日山	姫路市勝原区							9
14	横特山	姫路市勝原区							9
15	女夫岩	多可郡中町	1号墳	無袖	第１主体	1.25以上	0.5	人骨・刀子、埋土に炭	11
					第２主体	0.8	0.35	人骨	
					第３主体	0.87	0.37	人骨	
					第４主体	0.98以下	0.35以下	人骨・刀子	
16			2号墳	無袖	第１主体	1.2	0.6	人骨（大人・子供）・耳環２	
					第２主体	1	0.45	人骨	
17	石垣山	多可郡中町	2号墳	左片袖？	1号石棺	0.7	0.35	金環１、底に炭混じる	12
					2号石棺	0.85		金環１・須恵器杯、底に炭混じる	
18	東山	多可郡中町	12号墳	無袖	羨道			人骨（２体分？）、刀子２、耳輪１、須恵壺敷	13
19			13号墳	右片袖	最奥	0.75	0.2		5
20	入角	多可郡中町						十数基の古墳に石棺存在	12・14・15
21	坂本	西脇市坂本	1号墳	右片袖	玄室袖	0.68	0.4		16
22	高松	西脇市高松町	7号墳	無袖	1号棺	外0.95	外0.8		16
					2号棺	外0.8	外0.55		
					3号棺	外0.95	外0.68		
23	ヤクチ	加西市大内町	4号墳	右片袖	玄室中央	0.78	0.37	組合せ式家形石棺	3
24	状覚山	加西市網引町	6号墳	無袖	奥	0.77	0.46		17
					手前	0.71	0.37		
25	状覚山	加西市網引町	7号墳	無袖	奥中央	0.71	0.46		17
26			10号墳	無袖	奥中央	0.88	0.44	金環・管玉２・鉄刀子	
27			12号墳	無袖	奥壁利用	0.65	0.5		
28			15号墳	無袖	１号棺	0.7	0.7		
					２号棺	0.8	0.5		
29			16号墳	無袖	奥	0.6	0.4		
30			17号墳	無袖	中央	小規模			
31	奥新田東	加古川市平荘町	２号墳	無袖	１号棺	0.96	0.48	炭・灰混じりの土が充満	本報告
					２号棺	0.77	0.43		
					３号棺	0.9	0.3		
					４号棺	0.63	0.35		
					５号棺	0.75	0.5		
					６号棺	0.76	0.28		
					７号棺	0.78	0.24		
					８号棺	0.5	0.2		
					９号棺	0.4	0.2		
32	中山	加古川市平荘町	３号墳	左片袖	右奥	1.2	0.48	棺内鉄刀・銅鐸	19
33	大亀谷山	加古川市平荘町		両袖		0.84	0.48	袖部に存在	18
34	カメ焼谷	加古川市上荘町	２号墳	無袖	奥	1.1	0.4	勾玉・切子玉・刀子	19
					中央	0.5	0.5		
					入口	0.5	0.4	床面に灰と焼土	
35	中番地区	小野市中番町	４号墳		１号棺		0.45		20
					２号棺	1.03	0.3		
36			22号墳			0.85	0.4		
37			23号墳			1	0.5		
38	勝手野	小野市委田町	６号墳	無袖	中央	0.6以上	0.3		21
39	寺口千塚	北葛城郡新庄町	10号墳	無袖	奥中	1.35	0.45	大腿骨と歯が近接出土、刀子１・耳環１	22
40			14号墳	無袖	奥	1.5	0.5	刀子１・人骨	
					奥中	1.08	0.6	骨片	
41	石光山	御所市元町	19号墳	左片袖？	西棺	1.36	0.36		23
					東棺	1.4	0.36		
42			22号墳	竪穴系？	中央	約0.7	約0.35		
43	下名倉	三重県一志町	４号墳	両袖	奥奥	1.15	0.4		24

単位（m）

第２表　横穴式石室内の小型石棺一覧表

加西市には前記のヤクチ4号墳のほかに状覚山古墳群[17]があり、7基に小型石棺が認められる。10号墳の石棺内からは金環1と管玉2、刀子が出土している。いずれの古墳も7世紀後半と考えられている。

加古川市域には奥新田2号墳のほかに、大亀谷山古墳[18]、中山3号墳、カメ焼谷2号墳に小型石棺が認められ、1.5mを越えるが、神子谷1号墳[19]も存在している。中山3号墳[19]の棺内からは鉄刀と銅環が出土し、詳細な時期は不明であるが、その他の古墳は7世紀後半～末に比定できる。カメ焼谷2号墳[19]は3棺が直列し、最奥棺からは勾玉・切子玉・刀子が出土し、最も入り口に近い棺には灰と焼土が認められた。

小野市域には中番4・22・23号墳[20]に石室内小型石棺が存在し、小型石棺のみ検出された17号墳では、長さ65cmの石棺内に成人男性の頭骸骨と四肢骨が集納されていた。勝手野6号墳[21]は装飾付須恵器が出土した古墳として有名であるが、石室内に石棺が存在していた。石棺は割れており、長さは不明であるが、幅が30cmと狭いことから、長さも1.5m未満と推定される。ＴＫ217型式である。

以上、兵庫県内の小型石棺を有する横穴式石室墳は、西播磨では姫路市や太子町といった南部に限られ、時期が判明しているものでは、東播磨に比べて古いものが目立つ。一方、東播磨ではかなり北まで存在しており、加古川中・下流域のなかでも右岸水系に集中している。特に集中が著しいのは小野～西脇市域を除いた中町・加西市・加古川市域で、加古川水系全体数の8割以上を占めている。ただし、西脇市域や加東郡社町、小野市中番といった加古川本流左岸にも少数存在している。

一方、兵庫県外に目を移してみると、奈良県にも数例存在していることが判明した。奈良県北葛城郡新庄町寺口千塚古墳群と御所市元町石光山古墳群である。寺口千塚古墳群[22]では、調査された古墳中の10号墳と14号墳の2基の横穴式石室内に小型石棺が存在し、10号墳では石棺内より大腿骨と歯が接して出土しており、改葬墓と考えるべき指摘がされている。人骨は子供ではないことが判明し、石棺内からは耳環と刀子が各1点出土している。石棺の下から多量の釘が出土していることから、木棺埋葬の後に石棺が安置されたと考えられている。その時期はＴＫ209型式である。14号墳の石室内には2棺が存在し、奥の第1棺からは刀子と若年成人と推定される人骨が出土している。時期はＴＫ43～ＴＫ209型式で、兵庫東播の例よりも古く位置づけられる。19号墳は石棺の長さ1.8mと長く、未調査で時期も不明だが、参考例として挙げておく。石光山古墳群[23]中の19号墳は石室奥壁に接して2棺並列し、6世紀末～7世紀初頭の時期が与えられている。22号墳では小型の石室内に1棺存在するが、石室は非常に小規模で、正確な時期は不明である。49号墳も石棺を内蔵するが、長さ1.67mと大きい。参考に掲げておく。

奈良県以外で管見に触れたのは、三重県一志町下名倉4号墳[24]である。両袖の石室内に長さ1.15mの小型石棺を内蔵する。時期は7世紀前半である。やや規模の大きな石棺を蔵する古墳も近隣に存在[25]する。

なお、横穴式石室内に収められた小型陶棺では、岡山県備前市惣田奥4号墳[26]などが認められる。

以上、横穴式石室内に小型石棺を内蔵する古墳を瞥見してきたが、奥新田東2号墳ほど数多い主体部が認められた例はなさそうである。

石棺内の副葬遺物をみると、耳環の出土が目立つ。しかし、その数は1点が殆どで、副葬する品物として形骸化している可能性が高い。また、刀子も認められ、副葬品のセットであったのかも知れない。

石棺内の人骨が良好に遺存していたものについては、その大半が子供ではないことや、骨の配置から集骨改葬された状況を示すものとなっていることに注意が必要である。また、石棺が設置される前には木棺が存在していたことを示す例が多く、石棺が置かれていないスペースが存在するものも多い。つまり、改葬される前に同じ石室内で木棺等に遺体を葬り、一定時間の後石棺に集骨したものと推定される。

これらの石室内小型石棺が存在するのは、大和や西播磨では6世紀末～7世紀前半、東播磨では、既

に指摘されている[15]ように、7世紀の後半にそのピークが認められることが判明した。大和ではその分布が大和盆地南東部に限られ、小型石室もまた、葛城山東麓地域に集中していることが指摘[27]されている。横穴式石室内に小型石棺を安置する情況が、播磨と大和盆地南東部に集中することは、その共通するところに家形石棺製作の中心地である点を挙げることができる。つまり、播磨の竜山石と大和の二上山の採石に係わる集団との共通点がある。また、播磨北部の中町地域には、7世紀末にあって、長さ2mを越える組み合わせ式家形石棺を蔵する村東山古墳[28]があり、石棺製作集団との深い結びつきを想像させる。一方、小型石棺にとらわれずに視点を変えれば、石棺や小型石室等が多く存在する地域では、その周辺に石材が豊富に存在することが挙げられ、単に地質的な理由による分布の偏りということも否めない。

いずれにしても、石室内小型石棺が示すものが改葬とするならば、7世紀頃から改葬が多く認められるようになるという観点[29]で終末期群集墳を捉え直す必要があり、葬制における大きな画期となる。終末期群集墳に埋葬される集団にとっては大きな変動の時期であったと想像される。なお、小型石棺内に炭・灰混じり土が堆積しているのは、火葬骨を入れた可能性も考慮すべきと思われる。奥新田東2号墳のように周溝内に多量の炭の集積が存在するものや、炭・灰が入った焼土壙が周辺に存在し、石棺内で炭・灰混じり土が検出されるのは火葬に関連したもの[30]として、木棺墓に葬ったのち改葬するものとは別に扱う必要性を感じるのである。

今後は、家形も含めた小型石棺直葬のものや、伸展葬ができないような小型石室についても、人骨の遺存状態や炭・灰の残存状況とからめて、さらに追求してゆく必要があると思われる。

文献

(1) 森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」『古代学研究』第57号　1970年　など
(2) 辰己和弘「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』第100号　1983年
木下保明「7世紀型古墳群について」『考古学論集』第1集　1985年
松本百合子「横穴式石室の終末（群集墳）」『季刊考古学』第45号　横穴式石室の世界　雄山閣　1993年
(3) 加西市教育委員会『ヤクチ古墳群』　加西市埋蔵文化財報告2　1985年
(4) 間壁忠彦「播磨の小石棺をめぐって」『今里幾次先生古稀記念　播磨考古学論叢』　1990年
(5) 中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室『東山古墳群Ⅰ』　1999年
(6) 兵庫県教育委員会『西脇古墳群』　兵庫県文化財調査報告　第114冊　1995年
(7) 東洋大学附属姫路高等学校『姫路丁古墳群』　1966年
(8) 文献（7）および文献（9）
(9)『姫路市史』　第2巻　考古学から見た姫路　1970年
(10) 三村修次・小山佳代「原・北町古墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和57年度』　兵庫県教育委員会　1985年
(11) 中町教育委員会『安楽田・女夫岩遺跡』　中町文化財報告4　1993年
(12) 兵庫県教育委員会『石垣山古墳群・石垣山遺跡』　兵庫県文化財調査報告　第129冊　1993年
(13) 文献（5）および、中町教育委員会『巨大石室墳を掘る』　中町文化財報告21　2000年
(14) 兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』　2000年
(15) 神崎　勝『加古川流域の古代史（上・中流篇）』　妙見山麓遺跡調査会　1989年
(16)『西脇市史』本篇　1983年
(17)「状覚山古墳群」『平成7年度　年報』　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1996年
「状覚山古墳群」『平成8年度　年報』　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1997年
(18) 兵庫県教育委員会『大亀谷山古墳』　兵庫県文化財調査報告　第212冊　2001年
(19)『加古川市史』第4巻　史料編Ⅰ　自然　考古　古代　中世編　1996年
(20) 小野市教育委員会『小野市中番地区群集墳調査概報』　小野市文化財調査報告書　第1集　1969年
(21)「勝手野古墳群他」『平成7年度　年報』　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1996年
『小野市史』第4巻（史料編Ⅰ）　1998年
(22) 奈良県立橿原考古学研究所『寺口千塚古墳群』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第62冊　1991年
(23) 奈良県立橿原考古学研究所『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　1976年
(24) 一志町教育委員会『下名倉古墳群発掘調査報告』　1971年
(25) 竹内英昭「三重県の横穴式石室研究」『研究紀要』　第4号　三重県埋蔵文化財センター　1995年
(26) 間壁忠彦・間壁葭子「惣田奥4号墳」『倉敷考古館研究集報』　第17号　倉敷考古館　1982年
(27) 楠元哲夫「黒石東古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』　奈良県立橿原考古学研究所　1976年
(28) 中町教育委員会『村東山古墳　坂本・谷遺跡』　中町文化財報告1　1992年
(29) 河上邦彦「終末期古墳における改葬墓に関する問題」『後・終末期古墳の研究』　雄山閣出版　1995年
(30) 森本　徹「火葬墓と火葬遺構」『大阪文化財研究』第2号　（財）大阪文化財センター　1991年